熊野の森から

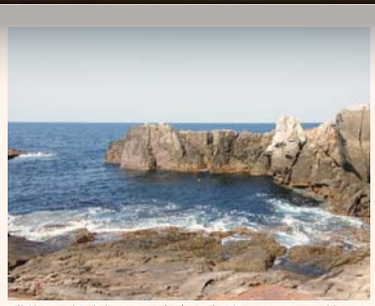
怪しの熊野

其の五八

「旧・白浜町の怪異（其の二）」

和歌山大学
システム工学部
環境システム学科
中島敦司教授

白浜の三段壁の付近、磯釣りの好漁場として有名なジョウモン崎の根元には「オキク」と呼ばれる岩棚がある。その昔、ここには貝がびっしり付いていたが、大蛸（おおだこ）が棲（す）んでいたために誰も近づかなかった。ところが、父をシケで無くした少女の海女のお菊だけは、怖いと思いながらも岩棚で貝を穫っては病気の母と幼い弟に食べさせていた。ある日、日が暮れてもお菊が戻らないことを心配した仲間の海女達は、翌日から毎日のように付近に潜ってはお菊を探すがいっこうに見つからない。大蛸にやられたと皆が諦めた頃、岩棚の平らな場所に貝や海老が置かれているのを見つける。人々は、お菊が母や弟のためにあの世から戻ってきて穫ったのだと思い、その後は見つけた者がお菊の家まで届けるようになった。そして、この岩棚は、いつしか「お菊の棚」と言われるようになった。



磯釣りの好漁場として有名な白浜のジョウモン崎には大蛸が棲んでいて、少女の海女のお菊が襲われたという。写真はジョウモンからみた隣の磯、大崎の様子。

北富田の庄川の牛屋谷の小滝には主の牛鬼（うしおに）が棲んでいるという。この牛鬼はきれい好きで、日照りの時、滝壷に牛の頭を流すと、牛鬼は流し去ろうとして雨を降らす。かつては、この牛鬼の性質を利用した雨乞い神事が行われていたという。滝に何かを流す雨乞い神事は各所で行われているが、牛の頭を流すタイプの神事は富田川沿いの数カ所でもみられる。その他にも、水辺の主の話はいくつか残る。姿は蛇のことも、龍のこともあり、鎌を嫌ったという。富田川下流の濁り淵には、普段は緋鯉（ひごい）の姿で水底の穴を出たり入ったりする主に命を奪われた与平の話が残る。この淵は田辺市上三栖弁天淵とつながっていて、主が双方を行き来しているという伝説もある。

国道42号線の一目トンネルの山の上には、目が一つしかない一ツ目狸が棲んでいて、目玉を大きく見開いて道行く人を驚かせるという。

富田と袋地区をつなぐ一目坂には目が一つしかない一ツ目狸（たぬき）が棲んでいて、目玉を大きく見開いては道行く人を驚かせていた。ある時、一目坂を通った盲目の按摩（あんま）さんを驚かそうとしたが、目の見えない按摩さんは全く驚かない。怒った狸は目をどんどん大きく見開いて、遂には顔から目が飛び出してしまい、そのままひっくり返ってしまった。以来、この坂を一目坂と呼ぶようになったという。今では、国道のトンネルでつながってしまったので一ツ目狸に出遭う人もいなくなったようだ。

中島敦司（なかしま・あつし）教授プロフィール

昭和38年、岐阜県生まれ。三重大学大学院生物資源研究科博士後期課程を修了。平成8年から和歌山大学システム工学部講師、12年から助教授。19年から教授。専門は森林生態、自然再生、砂漠緑化、海岸林再生、地域資源、地球温暖化、自然エネルギー、民俗（妖怪、伝承）。NPO活動にも力を入れる。熊野方面には年間30～50日は訪問し、研究する。